



アートと暮らしの幸せな関係

**特集** まちを再発見させてくれる 地域アートイベント「みてアート」西淀川区

**特集** アーティストとまちを育む 北加賀屋のまちづくり 住之江区

**特集** アートな存在「西長堀アパート」と大理石壁画 西区

大阪くらしの今昔館 news  
今昔館の正月飾り  
西王母双鶴図

大阪くらしの今昔館 news  
近世都市に展開する多様な生業 寄託資料「職人尽屏風」より

コラム  
大阪と浮世絵

トピックス  
「居住支援法人」を、ご存じですか？

アンケートにご協力ください

あんじゅバックナンバー

## 大阪と浮世絵

ヒトの運命というのはわからないもので、関東生まれの私が、ここ大阪の地に住まうようになってから丸10年が経過した。

就職して最初の任地が岐阜、次が京都。京都勤務時代の途中から大阪に住まいを移し、任地はさらに和歌山、そして現在の大阪へと移ったが、和歌山勤務時代も含め、ずっと大阪に住み続けている。理由は「息がしやすかったから」だ。

最初は観光ガイドブック（！）や街歩きガイドなどを片手に、大阪の街を歩くことから始めた。そこで気づかされたのは、いかに自分がステレオタイプな（観光ガイドブック的な）大阪像を抱いていたかということ。情けない限りだ。

大阪で働くようになってからは「大阪にいるのだから大阪のことを勉強しよう」と思うようになった。敬愛する地理学の先生（2021年3月御退任）に街歩きに連れて行って頂いたことが、そのきっかけだ。

ところで私の専門は美術史学で、結構長い間、浮世絵について勉強をしている。というわけで情けないくらい短絡的に「上方浮世絵」を勉強しようと決めた。浮世絵と言えば江戸（東京）のもの、というイメージが強いが、元々、「風俗」を描いた絵画としては上方が先。

版画の製作、流通においては江戸に遅れをとるが、それでも18世紀からは歌舞伎俳優を描いた役者絵や、それに少し遅れて、大阪風景を描いた名所絵も刊行され始めている。

そんな時、幕末に刊行された名所絵シリーズ「浪花百景」の一図を用いたポスターを発見（『新修大阪市史』）、現代の大阪でもよく知られたビジュアルなのだ知り嬉しくなった。細々とはあるが、現在も上方浮世絵の勉強を続けている。



『新修大阪市史 史料編第七巻』ポスター  
(大阪市立中央図書館大阪市史編纂所) /  
(大阪市立中央図書館にて撮影)

そんな上方浮世絵の中でお気に入りの作品の一つを紹介しよう。上方浮世絵を代表する絵師・長谷川貞信（1809-79）描く「浪花自慢名物尽」から「天満大根」。



長谷川貞信  
「浪花自慢名物尽 天満大根」  
国立国会図書館蔵

このシリーズは10図より成り、他に「福本（ふくもと）すし」「駿河屋煉羊羹（するがやねりようかん）」「玉露堂扇（ぎょくろうどうおうぎ）」「淀川鯉」などがある。天満の白大根は、天王寺蕪（てんのうじかぶら）や毛馬胡瓜（けまきゅうり）、玉造黒門越瓜（たまつくりくろもんしろり）などと共に、なにわの伝統野菜として有名で、文久3年（1863）刊行の『大坂産物名物大略』に、大坂名物として掲載されている。このうち、毛馬の胡瓜や玉造黒門越瓜などは絶滅の危機に瀕していたが、近年、復活の兆しを見せている。

と書いていたら、越瓜の復活を目指した「玉造黒門越瓜“ツルつなぎ”プロジェクト」の皆さんの笑顔が浮かんだ。どうやら私もようやく、大阪の街に馴染んできたらしい。



菅原 真弓（大阪市立大学文学部教授）

※大阪を描いた名所絵は、大阪府立図書館サイト（「錦絵にみる大阪の風景」）から見る

ことができる。  
<https://www.library.pref.osaka.jp/site/oec/nishikie-index.html>

あんじゅ89号の記事をもっと読む

近世都市に展開する多様な生業 寄託資料「職人尽屏風」より

トピックス 「居住支援法人」を、ご存じですか？

